第７課

【暗唱聖句】

「あなたは神を究めることができるか。全能者の極みまでも見ることができるか」ヨブ記11:7

【今週のテーマ】

なぜ良い人の上に苦難が襲うことがあるのか。ヨブは人間的な視点ではなく、神の視点で答えを知ろうとしていますが、なかなか答えが見えない中で再び友人の言葉を読んでいきます。

【日曜日　さらなる非難】

エリファズが語り終えた後、今度はシュア人ビルダドが言葉を続けます。同じような内容を繰り返しているのですが、言葉使いがとても厳しく、相手の気持ちを思いやるということに欠けています。その最たるものが、次の言葉でしょう。

「あなたの子らが神に対して過ちを犯したからこそ、彼らをその罪の手にゆだねられたのだ」ヨブ記8:4

子供を失った人に対して、このような言葉は本当に心無い言葉です。これは因果応報の考えであり、神は罪人に対して罰を与える恐ろしい方であるという間違った神認識から来ています。しかし、ヨブ自身も、「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」（ヨブ記1:5）と思い、自分の子供の代わりにいつも供え物を捧げており、また子どもたちの身に災いが起こったとき、「恐れていたことが起こった。危惧していたことが襲いかかった」（ヨブ記3:25）と語っていることから、ビルダドと同じような考えを持っていた可能性があります。それゆえ、ブルダドの言葉はより一層深くヨブを傷つけ、苦しめたことでしょう。

もし教会に来ていない子どもがいたら、いつも子どもが救われることを親は必至に祈っていることでしょう。しかし、もしその子どもが救われる前に何か不幸が襲ったとしたらどうでしょう。そこにビルダドがいたら、きっとこう言うことでしょう。「教会に来ないから、神様を信じないから不幸が襲ったのだ」と。これほどひどい言葉はないとわたしたちは思うことでしょう。しかし、言葉に出さなくても、あるいは心の中でそのような思いがよぎる人がいるのではないでしょうか。サタンは神様を自分に従わない者に対して罰を与える恐ろしい方だと思わせようとしているからです。しかし、神様は決してそのようなことをなさる方ではありません。

ではなぜ不幸が襲ったのでしょう。そう考えたくなるのが人間ですが、しかしヨブ記の学びの重要なポイントは、この「なぜ」と問いかけることから解放される必要を教えている点なのです。全的に神様を信頼する信仰へと導いているのがヨブ記なのです。

ただビルアドが語っている言葉の中にも正しい言葉はあります。たとえば、「わたしたちはほんの昨日からの存在で、何も分かってはいないのだから。地上での日々は影にすぎない」（ヨブ記8:9）という言葉です。本当にその通りです。ビルアドの間違いは、神様の一部だけを見て、それをヨブのすべての出来事に当てはめようとしたことです。

【月曜日　】

「あなたは神を究めることができるか。全能者の極みまでも見ることができるか」ヨブ記11:7

これらの言葉は私たちには神様についてわからないことがたくさんあるということです。人間は誰も神様を見極めることはできません。哲学者リチャードローティは「わたしたちは現実と真理を理解できない。できるのはそれにどう対処することだけだ」と言いました。

ナアマ人ツォファルの言い分は、ヨブに対して、神は正しい方であり、ゆえにあなたの苦難は自業自得なのであり、神がなさることに対して、あなたはとやかく言うことなどできないのだということです。しかも、付け加えるように「神が隠しておられるその知恵を。その二重の効果をあなたに示されたなら、あなたの罪の一部を見逃していてくださったと。あなたにも分かるだろう」（ヨブ記11:6）とまで言っています。

確かに、彼の言う通り、神様のなさることを人間は見極めることなどできません。だから、それに対してとやかく言うことなどできません。しかし、神様は人間とは違い絶対的に善であり、そのなさることはすべて益となり完全なのです。だから、様々な出来事に対して神様に不満を言うべきではないのはその通りですが、自業自得ということではないのです。ヨブ記の重要なテーマは、人間は神様のなさることを見極めることはできないということを認めたうえで、勝手に神様のなさることの良し悪しを判断せず、神様と自分との立ち位置を見つめ、そして神様のなさることはすべて正しいのだと信じていく。そのときに、苦難の中にあっても真の平安と救いが訪れるのだということです。

【火曜日　神の報復】

ヨブの友人たちは、神を擁護する立場に立って発言を繰り返しています。そして、苦難の意味がわからないで苦しんでいたヨブに対して、苦難を罪に対する当然の報いなのだという立場に立って苦しんでいるヨブの支えるのではなく、さらに苦しみに追い込んでいきます。考えてみると、「あなたは神を究めることができるか。全能者の極みまでも見ることができるか」（ヨブ記11:7）と主張しておきながら、自分たちは神のことをさもわかっているという立場になっているのは矛盾しています。彼らの一貫した理解は、神は正義であり、罪に対しては報復的な罰を与え、善には祝福をもたらすという単純なものでした。

確かに創世記の大洪水の物語やソドムとごモラの物語は、罪に対する神の報復的罰の一例です。しかし、ノアやロトが恵みを得たように、神の救いの御手が常に伸ばされているのも事実なのです。

「箱船に打ち付けられるつち音一つひとつは、人々を説教していた」エレン・G・ホワイト

ヨブの友人たちは大洪水やソドムの物語をどこまで知っていたかわわかりませんが、彼らのような考え方は理にかなっており、わかりやすいものです。むしろ、神の愛と恵みの事実を理解するほうが難しいかもしれません。人類に対する最後の裁きに対して、どれほど酷い罪を犯した人に対しても、神の御子が命をかけて救いの御手を差し伸べておられるということを理解するのは簡単なことではありません。

【水曜日　もし主が新しいことを創始されるなら】

6:24 主は我々にこれらの掟をすべて行うように命じ、我々の神、主を畏れるようにし、今日あるように、常に幸いに生きるようにしてくださった。6:25 我々が命じられたとおり、我々の神、主の御前で、この戒めをすべて忠実に行うよう注意するならば、我々は報いを受ける」申命記6:24，25

聖書の中には、わたしたちに神様が祝福と繁栄をもたらしてくださる法則について書かれてあります。それは常に神の掟に従うならばということです。恵みによって救われるという教えが強調され、神様の戒めは守らなくても良いと主張する人がいます。しかし、み言葉は真実です。神様の教えに忠実に生きてる人が大きな祝福を受けている姿を実際に見ます。わたしたちは救われるために、交換条件として神様の教えを守るのではありません。神様に愛され、神様を愛しているからそうするのです。

では、神様の掟を守らなければどうなるのでしょうか。ただ単に祝福を受けることができなくなるだけということでしょうか。

「しかし、もし主の御声に聞き従わず、主の御命令に背くなら、主の御手は、あなたたちの先祖に下ったように、あなたたちにも下る」第一サムエル12:15

「だが、もし主が新しいことを創始されて、大地が口を開き、彼らと彼らに属するものすべてを呑み込み、彼らが生きたまま陰府に落ちるならば、この者たちが主をないがしろにしたことをあなたたちは知るであろう」申命記16:30

聖書は神様の教えに従わないことによって起こる災い、裁きについて言及しています。これは事実です。しかし、何度も何度も警告が与えられ、繰り返し救いの御手が伸ばされているのに、人がそれを拒み続けた結果、起こるのです。

【木曜日　第二の死】

「しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです」第二ペテロ3:7

神の報復的な裁きにおいて、最も顕著なのが主の再臨によってもたらされます。しかし、もう一つ知っておかなければならないものがあります。それは「第二の死」と呼ばれるものです。すでに眠りについている者たちがもう一度裁かれるために復活し、そこで第二の死を経験します。実は、キリストの十字架はこの第二の死に対する贖いであり、神を信じて救われるものたちは第二の死を経験することはありません。

このような裁きは確かに、神を信じ、悔い改めることをしなかった罪の結果起こるものです。しかし、だからといって、今起きているこの世のすべての苦しみが罪の結果とは言えません。ヨブ記を読むことで、そのことが明らかになります。